

オセアニア船旅 2018③

【ニュージーランド編】



2018年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

オセアニアの船旅を2018年1月8日～3月4日の56日間で行ってきた。その旅行記は既に東南アジア編、オーストラリア編を発表してきたが、今回はニュージーランド編としてまとめた。

第一章 ニュージーランド南島

■ポリネシアン・トライアングル

航路説明会が開かれる。面白いことがいくつかあったので書き留めておく。

ハワイ、ニュージーランド、イースター島を結ぶ三角形をポリネシアン・トライアングルと呼び、この三角形の中の島々は文化、人種、宗教、言語などが非常に近いという。昔から交流が盛んだっただろう。ただこの三角形の面積はヨーロッパの3倍というから広大で、その行き来は小さな手漕ぎ船か帆船しかなかったのだから、すごい海の民族だったと想像できる。

そして台風の渦の巻き方が北半球は反時計回りなのに対して、南半球ではその反対の時計回りになっているから面白い。天気図の見方が全く変わってくる。

■船上バーベキュー (BBQ)

今日は昼から8階後部デッキでBBQ大会があり、船の専属バンドの生演奏と炭火のBBQを洋上で楽しめるのは格別だ。私も居酒屋仲間たちと参加したので昼間から美味しいビールを飲んでいる。

このBBQはクルーが焼いてくれるのではなく、乗客自身が焼くのだが、炭に火をおこし準備や片づけは全てクルーがやってくれるから楽だ。

さらに私たちの仲間でBBQの焼き係を率先して担当してくれる人がいるからありがたい。何でも手が熱くなるので前回の上陸ついでに手袋を買ってきたと言うから恐れ入ってしまう。

聞いた話では、この人は会社の社長だったということで普段は料理の類は何もやらないらしいが、こういうイベントになって気持ちがハイになって積極的に体が動くというから人間とは面白

い。

実に手際良く、肉に野菜に魚介類を焼き絶妙な味付けで、これでもかと出てくる。本人は趣味でやっていると言うが、こういう趣味はありがたい。

それにしても大量の食材が用意されていたので、焼くのも大変だが食べるのも大変だ。焼き物以外に事前にテーブルにはおにぎりや焼きそばも置かれており、年齢構成が相当に高いのでとても食べきれないの是一目瞭然だろう。

焼いて大量に余った肉や野菜をクルーが片づけてくれるが、何かもったいない。どんな気持ちでクルーたちは片づけているのだろうか。



■当局から「待った」

2月10日はニュージーランドのフィヨルドのミルフォード・サウンド遊覧の日になっているが、朝6時に船内放送が流れて検疫当局からの指示でリトルトンの港に行かなくてはならなくなったので、本日の予定を変更して急きょリトルトンに向かうと言っている。当局からの命令は絶対で、「待った」がかかった状況だ。リトルトンはクライストチャーチの外港でクライストチャーチ観光の玄関口になっている。

予定変更は珍しくないが、当日というのは珍しい。多分、船の方も相当に混乱しているに違いない。そして今後の日程は調整中という。

昼食時に、変更された日程の発表が船内放送から流れた。かなりタイトな日程になっている。しかし、昼食のテーブルに集まった人からは日程のことよりも当局から「待った」がかかった理由の方に興味移っている。

ある人はこの船の政治的志向性を当局が問題視して調べるためと言っている。かなり左がかっているのは事実だろうが、検疫というのが本当ならばやや無理があるかも知れない。

別の人は病気蔓延説を唱える。インフルエンザが蔓延しているので事前に検査したいのだとい

う。別の大型客船の話だがノロウイルスで上陸禁止になった事例があったという。だから昨夜には診療室便りを全客室配布して対策を実施中というつじつま合わせしているのだと言っている。しかしそれならばミルフォード・サウンドは遊覧で上陸しないので遊覧に待ったをかける意味が理解できない。

そして私の説はというと船内のゴミの海洋廃棄だろうと考える。この船のゴミは圧縮して粉碎して海に廃棄していると聞いたことがある。だからきれいなミルフォード・サウンドに入れる前に立ち入り調査したいというのでこのタイミングで待ったをかけたのだろう。

どの説が当たっているか、分からない。あるいは他の理由かもしれない。しかしどの場合においても真実は明かされないままになるのだろうというのが一致した意見だ。

夕方に 5 階のレセプションの前に行くと怒りの乗客で溢れている。日程が変更になりリトルトンの寄港時間が大幅に少なくなったので、船が用意していたオプションツアーは全部中止になった。費用は全額戻ってくるとはいうもののクライストチャーチ観光を期待していた乗客は怒り心頭だ。

しかしこれらの乗客以外でも私たちのように自由行動をする乗客にとっても影響は甚大だ。私たち夫婦はクライストチャーチに語学留学していた Nさんとレンタカーと一緒に回る約束だったが、この見通しがつかなくなり作戦再検討になる。

18 時頃にニュージーランド南島の最南端の沖を通過する。さらにその南にあるスチュワート島もかすかに見える。ここの緯度は今回のクルーズで最も南で南緯 47 度だ。私にとっても南緯 47 度は南限の更新になる。何しろ私は南半球が初めてなので今回のクルーズはその更新の連続になっている。

北半球に例えれば北緯 47 度、稚内にある日本最北端の碑は北緯 45 度 31 分なので、それよりもかなり北、サハリン（樺太）のユジノサハリンスク辺りになる。

■もう一つの有力説

2 月 11 日朝食のテーブルでの会話で検疫理由としてもう一つの有力な説が出てきた。ミルフォード・サウンドは海が入り込んだフィヨルドで海の一部のような感じがするが、ニュージーランドの国内観光に当たる。それを検疫も受けていない船が勝手に入ることを当局が許可しなかったのではないかという説である。

恐らくミルフォード・サウンドの入口でパイロット（案内人）が乗り込んできて検疫は済んでいるか、という質問に船側が初めてその必要を知ったのではないかという。そこで慌てて検疫所のあるリトルトンに向かっているというもっともらしい話である。

この説はもっとも有力な気がしてきたが、それならば船側のミスだ。だとすると尚更事実は明らかにされないだろう。

■乗客の不満

船が接岸する港町リトルトンからクライストチャーチまでは 12km 程ある。路線バスはあるものの 1000 人近い乗客が 30 分に一本の市営バスに殺到すると大変なことになると誰もが予想でき

るので、船側がクライストチャーチまでのバスを運行させるという船内放送が入る。問題は往復で 3500 円と破格の値段である。市バスが片道 300 円程だから確かに高い。乗客の間からはこの対応に不満の声が続出している。

今回の原因が船側のミスかどうかは別として、オプションツアーの中止と全額払い戻しは収入がなくなるだけではなく、現地のバス会社などに対して違約金が発生するだろうから持ち出しになる。それは理解できるものの、もう少し乗客が納得できる対応ができないものか。

■クライストチャーチへ

船はリトルトンに接岸した。当初予定に対して 8 時間も遅れての接岸なので私たちも大幅に予定を変更し、レンタカーを諦めクライストチャーチの散策だ。

メンバーは N さんとその友人 T さん、そしていつもの居酒屋仲間たちだ。クライストチャーチは人口約 40 万人で南島最大の都市だが、市街地はそんなに広くないので歩いても簡単に回れる。

2011 年 2 月カンタベリー大地震があり、この街も大被害を受け日本でも報道された。中でもクライストチャーチ大聖堂は高い塔の部分が崩壊して、今も半分崩れたその姿を見せて建っている。



この大聖堂の再建までの間というので仮設の大聖堂が別の場所に建てられて、ここがまた観光名所になっている。それは仮設なので「紙」で造ったという。

実際に行って見ると全部が紙ではなく、外装は軽量の半透明プラスチック、内部は直径 50cm 程の紙の管を組み合わせてできている。何と十字架までも紙の管だ。紙といっても特殊加工を施しており 50 年はもつというから驚きだ。

紙も、神も、日本語ならば同じをカミと読みということだろうか、この教会は日本人がデザインしたという。斬新な発想そして、日本のリサイクルやモノづくり技術がこんな処でも活かしていることに元技術者の私としては何故か嬉しくなる。

自分の技術が世の中の役に立ち、そしてそれを見るために人々が足を運ぶ、まさに技術者冥利に尽きる。



観光用の ترام、いわゆる路面電車が市街地を一周している。それこそ商店街やアーケードの中まで狭い路地まで入り込んでいるのはありがたい。25 ニュージーランドドル (NZ\$) で一日乗り放題になっている。日本円では約 2000 円、この国の物価は日本よりも高いかもしれない。

福岡のおばさん二人が子供のように ترامが可愛いから乗りたいと言う。他のメンバーも子供に戻ったのか瞬く間に意見が一致する。確かにこの街の ترامはレトロ調で可愛さいっぱいので何故か愛嬌がある。



トラムはゆっくりとした速度で、運転手は観光ガイドを兼ねていろいろと説明してくれる。英語なのであまり良く理解できないが、運転手の一生懸命さと人柄の良さは十分に伝わってくる。



街はきれいで道も広い、大学、教会、歴史的建造物、川と緑があちこちにあり、近代的なビルも多く建ってはいるが、高層ビルはなく、比較的low層なビルばかりだ。そのためなのか街がコンパクトにまとまっている印象を受ける。ただコンパクトと言っても道路は広く、建物の敷地も広いので、ゴミゴミ感は全くしない。この街が日本人観光客や若い女子留学生に大変人気がある理由が分かる。



街のあちこちは地震の爪跡が至る処に残っており、壊れたままの建物、建設中の建物などが混在しており、まだまだ復興の最中という印象が強い。

ハグレー公園という市街地にある大きな公園に立ち寄る。広くてきれいな公園はオーストラリアでも多く体験したが、ここもまたとんでもなく広い。日比谷公園の16倍という敷地は緑で覆われており、基本は芝生と歩道、そして高い木々が茂る。そしてところどころに花壇や池が配置されている。



港に戻り、少し暗くなっているが帰船リミットまで時間があるので買い物を兼ねてリトルトンの街の散策に出かける。リトルトンはクライストチャーチの外港で人口 3000 人の小さな港町だが、小さなスーパーマーケットの 1 つ、2 つくらいはある。



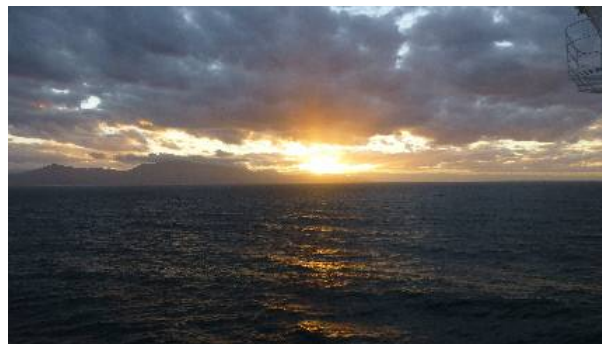
前を歩くおばさん 3 人組がいる。面倒見の良い H さんの顔見知りなのだから、H さんが声を掛け街の情報を聞いている。どこにスーパーマーケットがあって、どこの店が安いとかよく知っている。

私はその店の情報ではなく、3 人の年齢を聞いて唖然とした。リーダー格のおばさんだけ 80 才くらいで、あとは 90 代というから驚きである。3 人で行動してこの異国の街歩きを存分に楽しんでいるからすごい。

傍にいた福岡のおばさんの T さんがポツリと言う。「この船に乗って痛感するのは、お年寄りがたくさんいるが、皆元気だけでなくしっかり目標をもって人生を楽しんでいる。私もこれからの人生計画を再考しないといけない」と。

■南緯 47 度

ミルフォード・サウンドに戻るので再びスチワート島の近くを通過する。ちょうどスチワート島に夕陽が沈むところで南緯 47 度の夕焼けショーはなかなか感慨深い。



■南十字星

夜は星がきれいに輝き、久しぶりに南十字星を見る。南緯が 47 度というと南十字星は高い位置にあるはずだが、そんなに高くない。それよりも南十字星の十字架は北半球で見るよりもかなり傾いて見える。150 度くらい左に回転しており、本来ならば十字架の一番下の星が右上にある。

南半球には北半球でいうところの真北極を示す北極星に相当する星がないのでこの南十字星の十字架の長い棒を約 4 倍に延長した位置が真南極になる。そして位置を眺める角度が南緯に等しいので 47 度という事になり、確かにそのくらいの高さにある。そんなところまで来ているということを実感する。

■ミルフォード・サウンド

2 月 13 日ミルフォード・サウンド遊覧の日になる。残念ながら朝から雨で、風も強く天気は良くない。

氷河の浸食によって削り取られた断崖がそそり立っている風景は通常はフィヨルドと呼ぶのだがここはサウンドと呼んでいる。何でも最初見つけた時にはただの入り江と思ったのでサウンド（入り江）と名付けたためだという。そしてサウンドに「音」以外の意味があったことを私は初めて知った。

ニュージーランド南島の西岸にはサウンドが 5 つあるが、最初に 4 つのサウンドを遊覧して午後の 2 時半頃から一番大きいミルフォード・サウンドに入る。幸いにも雨は上がっているから運が良い。

外海から 10km くらい内陸に入り込むフィヨルドにこの大型客船でクルーズするのだからすごい醍醐味だ。距離的にはノルウェーのソグネ・フィヨルドには及ばない。ソグネ・フィヨルドは 50km 程内陸に入る。問題は距離よりも高さで、これについては同じくらいだ。

フィヨルドの一番奥まった処には観光拠点があってそこから遊覧船が出ている。通常の旅行者はそこから遊覧船に乗って外海まで行って戻るのが、我々は外海から入って一番奥まで行ってから U ターンして戻るという逆パターンになる。そして小型遊覧船に比べて高さがあるので視点が高くなり視野が広がる。

海面から山がそそり立っている。山の上の方は霧に隠れているのでどこまで高いか分からないが、写真に納まらないくらいの高山からは水が流れて川となって、最後は滝になって海に落ちている。そんな滝がいくつも目に留まる。

その中の水量が比較的豊かな一つの滝に向かって小さな遊覧船が水しぶきを受けながら進んでいく。ナイアガラの滝に向かって行く遊覧船ツアーがあったがその光景を思い出す。日本でも滝に打たれる修行もあるので人間は元来滝に何かを求めるのが好きなのだろう。

ガイドブックによると滝の名はスターリング滝で高さは 155m となっている。日光華厳の滝が 97m、那智の滝が 133m なので高さの差はもちろん、水量の差はそれ以上にある。

約 3 時間のミルフォード・サウンド遊覧はニュージーランドの大自然を十分に堪能できた。天気も回復し乗客たちも満足しているようだ。日程変更が功を奏した感じだ。



■誕生会

ミルフォード・サウンド遊覧の日、私を師匠と呼んでいる岡山のおばさんの誕生パーティに招待されている。彼女は私の落語を聞いて弟子入りしてきたのだが、地方テレビ局の元アナウンサーだというから私が弟子入りしたいくらいだ。

集まったのは手品の先生、俳句の先生、そして友人のおばさんたちと多彩で面白い。特に驚いたのは、現役は引退しているものの元新聞記者、警視庁捜査一課の元刑事と凄いメンバーだ。

夕方5時から始まった誕生会は場所を変えて2次会へと進み、11時までたっぷり。終電車を気にしない船ならではの飲み会になる。

■純潔の日本人はいるのか

船内企画の「アイヌが見渡す世界」というアイヌアートプロジェクト代表の結城さんの講演に行く。彼はアイヌの血を引く人でニュージーランドの先住民族である「マオリ」との交流などもありシドニーから乗船してきた。

アイヌの世界観とか、置かれている状況、歌や楽器を披露しながらの講演はなかなかのものである。何よりも彼の謙虚ながら純粋な人柄が伝わってくる。

講演とはそういうものかも知れない。事実の紹介や論理の展開も重要なのだが、聴く側の気持ちや受け止め方に人柄という要素は大きいということだ。とても重要なことを新たに感じさせてくれた。

そしてもう一つ、忘れられない言葉を紹介しておこう。純潔なアイヌはもういないという政治家の発言に対して彼が語ったことだ。

「それでは純潔の日本人というのはいるのか？」だった。

そもそも日本人のルーツは南方系、朝鮮系、北方系の混血だ。そして島国という地理的条件や鎖国政策などで日本人というアイデンティティーみたいなものが確立しただけのことだ。

■バレンタインデー

バレンタインデーということで夕食はコース料理だ。おしゃれをしてレストランに来てくれということでスーツやドレスの紳士淑女が船内を歩いている。

居酒屋仲間で山形のSさんは山形弁の正統継承者とでも言われそうなミスター山形弁だ。彼もディナーに備えるべく友人に「ネクタイ貸してケロ」と言ったら、友人は絶句して固まってしまったという。何かにおびえるような目をしながら、じっとSさんを見つめていたという。

実は、友人にはネクタイではなくニクタイ（肉体）と聞こえたらしい。

私もその話をSさんから聞いたが、何度聞いても「ニクタイ（肉体）貸してケロ」だった。

■月の満ち欠け

夕食のテーブルで南十字星が高く見えるという話がきっかけに天文の話になり、南半球では月の満ち欠けが逆になるという話題で盛り上がる。北半球にある日本では真っ暗な新月から右の方から満ち始め三日目には三日月になり、そして半月、満月になる。しかし南半球ではその逆で新月から左の方から満ち始め三日月の形は逆の弓形になり、以下全て逆に満ち欠けになる。

私もその話は聞いたことがあったが、どうしても理屈が分からないでいた。しまいにはそれは迷信だろうなどと済ませてしまっていた。人間は論理立てて説明できない現象はみんな迷信にしてしまうようだ。

ところが、月の満ち欠けが逆になるのは事実で、このオセアニアクルーズでもその事実を確認しているという。私が理解できない理由やそう考える根拠を話していくと、ある人が簡単なヒントをくれる。

それは貴方が観測している立ち位置が常に北を上になっているからで、南半球の人は南を上にして立っている。つまり逆立ちして見れば確かに反対から満ち欠けが始まる。

この一言で全ての疑問が解明された。まさに目から鱗だ。

人間は自分の無知を素直に認め、先人に聞くということがいかに大事かということのをこの年で改めて思い知る。決して迷信などとして片づけてはならない。

ついでに付け加えると赤道付近では満ち欠けがまた異なる。それは右でも左でもなく、上から下へ満ちてくる。従って三日月は食べた後のスイカを逆さにしたような形で、上弦の月は上半分の半円になる。

第二章 ニュージーランド北島

■ オークランド

2月16日オークランドに予定よりも1日遅く到着する。遅れた理由はミルフォード・サウンド手前で検疫を受けるためにリトルトンまで往復したためだ。

そのおかげでミルフォード・サウンドからオークランドに行くルートで当初予定にないクック海峡を通過することになり、貴重な体験ができた。クック海峡は南島と北島の間の海峡で、最狭部は23km程なので津軽海峡くらいだが、首都ウエリントンはこの海峡に面した北島側にある。

オークランドは夏の日差しがきつく、天気予報の最高気温26℃よりも遥かに暑く感じる。

私たちはいつものメンバーに加えて、船を降りて電車の駅へ行く道を聞いてきたおばさん二人も引き込んで大遠征団が結成される。



私たちは電車で2駅乗ってニューマーケットという駅で降り、マウント・イーデンという高さ196mの小高い山を目指す。そこからはオークランドが一望できるというので暑い中を歩き始める。山の中腹は高級住宅街になっており、どこも広い敷地の中に豪華で落ちつきの有る家が建っ

ている。自分がこの敷地の主なのだという主張をしているかの如く威風堂々と建っている。

山の頂上付近にはイーデン・ガーデンという植物園とも庭園ともいえるようなものがあり、少し面白そうな感じもして休憩をとる場所もある。10NZ\$（約 800 円）といささか高価だが、休めるのと旅の記念にということで入場する。

植物園はそんなに広くはないが、手入れが行き届いていて様々な植物が極めて自然に生えている。森に自然散策に来ている感覚にさせてくれる。それにしても寒いところと思っていたが意外なほど熱帯ジャングルに生息しているような植物が多い。

更に面白い場所だと思ったのは、10 時 30 分が休憩時間らしく従業員と思われる中高年の男女のボランティアのような人たちが 20 人くらい集まってきて、私たちの隣のテーブルで紅茶とクッキーでパーティを始まる。どの人も楽しそうにお茶を飲み、幸せそうな顔をしている。この人たちはこの植物園で木々の手入れを行う傍らでこのような楽しいお茶の時間を過ごしている。

そしてお茶の時間は 1 時間近く続いた。この国の心の豊かさを垣間見た気がする。



イーデン・ガーデンは **Eden Garden** と書く。そうこれは「エデンの園」のことだ。

「エデンの園」は旧約聖書の創世記にある楽園（パラダイス）で、アダムとイブが最初に生活した場所で、「生命の木」と「善悪の知識の木」が植えられたとある。

神はアダムに「善悪の知識の木」の実を食べてはならないと言ったが、イブが蛇の誘いに乗りアダムと一緒に食べてしまった。それ以来、互いの裸を恥ずかしがるようになったという。そして子孫である人類共通に遺伝したという。木の実を食べていなければ今頃キリスト教徒たちは裸で生活をしていたかも知れない。

神はさらに「生命の木」の実も食べて人類が永遠の命を得るようになることを嫌い、二人をエデンの園から追放したと言われている。

イーデン・ガーデン内を散策していくと小高い丘に出て、そこからはオークランドが一望できる。オークランドは港町なので市街地と海とそして周辺の陸地や島々がきれいに見える。



オークランドの展望を楽しんだ後に、街に戻り昼食を食べる。

昼食には再びサーモンサンドを注文する。たっぷりのスモークサーモン、オニオン、オリーブの実、トマト、カマンベールチーズを大きなパンに挟んで食べる。今回もハズレはなく、とても旨い。



是非サーモンサンドは家に帰っても試してみたい。トルコのイスタンブールに行った時に食べたサバサンドが忘れられずに日本に帰って来てからも何度もサバサンドを家で作って食べた頃があったが、そうなりそうな気がする。

道を歩いていたら大きな教会にめぐり合う。ホーリー・トリニティ大聖堂と書いてある。本当に偶然に出会ったという感じで中に入ってみると、その荘厳さに驚く。新しい教会でステンドグラスがとても鮮やかだ。観光名所としてパンフレットには載ってはいないが、さりげなくこんな教会があるのは実に素晴らしい。



パーネルビレッジというおしゃれな街並みを通り抜ける。日本で例えるならば原宿、中軽井沢とでもいうところで観光名所になっている。



オークランド・ドメインという公園を歩く。この公園は街のど真ん中にありながらやや高台の広大な敷地にある公園で、手付かずの森林がそのまま残っている公園だ。暑い日差しを避けて森林浴をしながら歩くのは気持ち良い。

その自然の公園に隣接してオークランド大学がある。この大学は何て便利で良い環境にあるのだろう。校舎はみな近代的で美しい建物ばかりだが、その中心には古く大きな時計台がある。この時計台が堂々と建っているので大学全体の存在感も保たれているように感じる。



こんな大学ならば、私も再入学したいくらいだと妻に言うと、妻は孫たちに入学させて遊びに来たいと言う。一昨年生まれた双子の孫たちはまだ1才なので、まだ17年も先のことだが、目標を置くというのは良いことだろう。

留学先は、ここオークランドにするか、クライストチャーチにするか、それともオーストラリアのパーズにするか、迷うにことになりそうだ。

そこを抜けると今度は手入れが行き届いたアルバート公園に出る。さらにそこを抜けるとクイーンズ・ストリートというこの街最大の繁華街があるから凄い。1時間足らずの徒歩圏にそれらが隣接している。



そして港に戻り、港の近くをあてもなく散策する。海の方から吹いてくる潮風がとても心地よく感じられる。

そうしているところの街の良さがわかってくる。そう、この街には何でもそろっている。海があって、港があって、都会があって、公園があって、おしゃれな商店街があって、森があって、大学がある。そしてそれらは隣接しているのも関わらず、それぞれが個々に素晴らしい。さらに全体としても調和がとれているから凄い。これは歩かないとわからない。



その日の夜、船はオークランドの夜景に見送られて出航する。ニュージーランド最大の都市だけあって見事な夜景だ。

出航の音楽を聴きながら夜景を見ていると大きなクレーンに吊り下げられたレストランを発見する。クレーンの高さは 50m くらいか、もう少しありそうな気がする。ヨーロッパでは流行っているもので北欧に行った時に宣伝を見たことがあるが、本物は初めて見る。



■ オーバーランドツアー

船の日程遅れに伴いオークランドで船に合流するオーバーランドツアーもいろいろ大変になったということを知った。

オーバーランドツアーとは寄港地で降りて、次以降の寄港地までに飛行機を使って別の場所を旅する企画旅行のことで船では寄港しない観光地を見ることが出来る。

本来ならばオークランド入港は 15 日だったが、16 日になったので飛行機や宿の予約を全て見直さないと行かないが、それが困難なのか、あるいは飛行機が取れなかったのか分からないが旅行会社は最も簡単な方法をとったようだ。15 日に戻ってきて船が到着するまでオークランドで一泊して待つという作戦だ。

ところがホテルが取れなかったようで、ツアー客は空港について空港で一夜を明かしたという。それも航空会社のミスではないので毛布や食事も提供されなかったというから悲惨だ。いくら夏とはいえ空港のロビーで毛布もなく宿泊では高齢者にはきついだらう。

さらに言えば、ミルフォード・サウンドも見ることが出来なかったのだから踏んだり蹴ったりとはこのことだ。

■ 洋上運動会

今日は洋上運動会が実施される。若者が少なく、高齢者が多いので実施が危ぶまれていたが、あまり無理をしないような競技を選び、時間も短い開催になる。

伝言ゲームがあり、日本語でのゲームに続いて英語での伝言ゲームも実施される。英会話の先生や通訳のスタッフに混じって何人かの日本人の乗客もいる。当然 60 才はとうに過ぎたおじさん、おばさんたちだ。

その中にはレストランや居酒屋で話をした知り合いもいる。へえーあの人は英語堪能だったのかと驚き、感心してしまう。

私は最後まで運動会を見ることなく船室に戻ってきたが、最後まで残っていた妻が興奮して帰ってきた。妻の話では運動会は後半にどんどん盛り上がって最後はみんな感動したという。特に負けた方のチームのリーダーをしていたスタッフの女の子の頑張りや気配りに乗客から賛美の声が上がったという。このスタッフは先日の BBQ で一緒に飲んだ仲間なので、私も何だか嬉しくなる。

表舞台から舞台裏まで運動会を盛り上げたスタッフの労が報われたというものだ。

■女性落語家乗船

女性落語家の古今亭菊千代さんがオークランドから乗船してきたので早速聴きに行く。前半が自己紹介、後半は落語を一席という構成になっている。

彼女は 33 年前にこの道に入り、女性落語家の草分け的存在で女性初の真打だ。1956 年生まれで私と同じ年に生まれ、大学の落研にもいたという。大学は異なるが、私が落研にいた時期と重なることになる。

当時、女性に落語は無理だと言われ続け、諦めて就職したという。しかし 27 才の時に転機が訪れ、一生を後悔で終わらせたくないという事で無理やり頼んで弟子入りした。やはり男社会なので様々な苦勞をし、特に女性落語家ということで世間では冷ややかだった。

しかし刑務所の慰問に行った時に熱心に聞いてくれる囚人たちの笑いに救われたという。慰問に行った者が逆に救われた格好だ。

今回の乗船で乗客から弟子を募り、菊千代一門を作り落語や演芸を教えて最後に発表会をやるという。面白そうな気がして、早速入門届を出す。